

朝日 俳壇



＜日曜日のプローチ 43＞ junaida

● 佐佐木幸綱選

☆今日よりも明日はいい日と信じてる者だけの
居る真夜中のジム (八千代市) 松田 実樹
雪雲が浅間の峰を攻めてをり雲の裾より雪煙
上がる (小諸市) 星野 直人
自衛官の彼とデートの待ち合わせ今日の時間
はヒトフタマルマル (相模原市) 榎本 ハナ
胸の内語る心は半熟の卵の殻をそとと剥くよ
う (ひたちなか市) 安澤 美幸
指輪すら重くて肩が凝ると言った母の痛みが
今よくわかる (所沢市) 菱沼 志穂
白銀の壁を蹴ってはキラキラのネームの選手
が宙に舞いたり (春日市) 藤井 量子
☆はじめてのスキー合宿何回もキャリーの荷物
を確認する夜 (奈良市) 山添 葵
叱つても叱りきれない母親に「ママ大好き」
と孫が反撃 (羽生市) 本間 正実
手を繋ぎ施設入所の母送る笑顔を返す母の気
遣ひ (横須賀市) 岩崎 和子
知らぬ間に雪掻きしてくれし人ありき老いの
身に浸む人の情けよ (つくば市) 和田 瑠璃

【評】第一首、深夜のスポーツジムにスポットライトを当てて、上句、新鮮。行ってみたいと思う読者も多いだろう。第二首、雪の浅間山をうたって、うまい。とくに下句に注目。第三首、デートをうたってユニークな作りにあげた。

● 高野公彦選

めぐみさんの母堂九十歳の美しさ悲しき極み
を長く耐へつつ (大分市) 岩永 知子
二スのおかけ (新潟市) 大滝 慶作
一週間スマホを持たぬ生活で取り戻したる読
書の楽しみ (高崎市) 野口 啓子
きさらぎの川辺に拾うひとひらの白鳥の羽毛
そのピアニッシモ (福島市) 美原 凍子
日本一が福島県にありますよ原発廃炉がすら
つと十基 (郡山市) 寺田 秀雄
雨不足で底が見えたる宮ヶ瀬ダム四十年前の
道路が現はる (横浜市) 松村千津子
代金入れず野菜持ち去る客のいて無人販売所
飼い犬繋ぐ (船橋市) 清水 渡
剪定のわれに近づくルリビタキ青と橙雪に華
やぐ (千曲市) 米沢 光人
戦争を起さぬひとに入れたしと投票にゆく
受験生の子 (和泉市) 星田 美紀
☆はじめてのスキー合宿何回もキャリーの荷物
を確認する夜 (奈良市) 山添 葵

【評】1 首目、拉致された横田めぐみさんの母・早紀江さんへの深い同情。2 首目、下句がユーモラスで楽しい。3 首目、便利さから離れた生活の楽しさを歌う。4 首目、白鳥の一ひらの羽毛の美しさを「ピアニッシモ」で表現したのが斬新。

● 永田和宏選

「健康に育ててくれてありがとう」除雪しな
がら泣かせないでよ (富山市) 松田由紀子
家中をピカピカにして父は待つコーヒー豆を
挽きながら待つ (富山市) 松田 梨子
姉は笑い母と私が泣いちゃった「娘さんを」
の言葉を聞いて (富山市) 松田 わこ
プラナリア再生の秘密知りたくて実験のため
友と探す水辺 (厚木市) 杉山久美子
子と二人領き合ってEnglishを押す朝九時の
合格発表 (奈良市) 山添 聖子
普通の国にならなくなどなし戦せぬ特別な国
であり続けたし (沼津市) 山本 昌代
保守を推す若人ふゆる此の国の今此の時に吾
れは老いゆく (東京都) 斑山 羊
樫人が熊を崇めて熊もまた人を怖るる昔思へ
る (相馬市) 根岸 浩一
たとう紙の紐を解けばしつけ糸残りしままの
春ほころびぬ (鎌谷市) 都丸 浩美
そのひとのどこが好きだかわからずに全部を
好きと言えるのが恋 (札幌市) 住吉和歌子

【評】冒頭三首、併せて読めば状況は自ずから明らか。特にお母さんの一首がよい。おめでとうございます。杉山さん、「切っても切ってもプラナリア」は私の友人が創ったコピーだが、再生のモデル生物。山添さんも、きとおめでとうだろうな。

● 川野里子選

人が死ぬ時は銀虫やたら舞う捕虜たりし悲痛
父は話した (千曲市) 関 津和子
民意とはかくも鋭角に曲がるとか解きもせず
朝刊を見る (和歌山市) 貴志 眞澄
常に使ふシルバーカーも水にすべり盛岡の路
は選挙を拒む (盛岡市) 堀米 公子
スーパーの嶺「本日半額」が一瞬見えた「日
本半額」に (金沢市) 竹内 二二
声は風 人の六割水らしく君に揺らめく心の
湖面 (筑後市) 近藤 史紀
震災に台より落ちて動かざりし青銅の高青葉
城址の (東京都) 椿 泰文
グツグツと愚痴まで編みし毛糸帽妻はかぶり
て日向のほひ (香取市) 嶋田 武夫
☆今日よりも明日はいい日と信じてる者だけの
居る真夜中のジム (八千代市) 松田 実樹
明るすぎる日曜を終えて軍服はマクドナルド
のロッカーにある (甲府市) 村崎 残洋
枯薄一本びんと跳ね返るさては小鳥が止まっ
ていたな (下関市) 内田 恒生

【評】一首目、捕虜の目に近づく死は「銀虫」となって見えたのだ。二首目、「民意」とは何なのか、驚き見つめる。三首目、雪国での現実だ。八首目、希望に満ちた風景というわけでもない。九首目、制服を「軍服」と感じる一日が終わった。

うたをよむ 「現代たごと歌」最新線

今井 聡

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する
人みな前を向く 『三輪幼虫』
現代たごと歌のバイオニアとされる
奥村晃作の歌。第一歌集所収のこの歌
は、奥村曰く「気づき・認識のたごと
歌」。気づきを軸として、日常の此事を、
平易な言葉を用い、定型で活写する。
ポールペンはミツビシがよくミツビシ
のポールペン買ひに文具店に行く
『鴉色の足』
現代たごと歌は、寂しい、悲しいな
どの情を示す語を極力用いないことを旨
とする。その根底には人のこころの動き
の複雑さそれへの懐疑を含む。奥村の
生まれは昭和十一年。現代たごと歌と
は最終二・近藤芳美ら戦後派短歌の継承
も含んでいる。叙述のかたちでそのモノ
・事を述べ尽くした時、そこにこころが
現れて来るのだ。これは奥村の言葉。
昨年奥村の最新歌集「天啓」(短歌研
究社)が上梓された。気づき・認識の
歌、叙述の歌、されど素直な言葉で偽り
の無い「こころの表現」を目指す、オク
ムラ短歌の最新版がここにある。
寄せて来てテトラポッドにうち当たり
しぶけるまでの波を見たとき『天啓』
地に敷ける花びらどれも一回のただ一
回の落下をせりき
一首目は巻頭歌、奥村の視線はテトラ
ポッドから自ずと波の動きに移ってい
く。寄せて来て、うち当たり、しぶけ
る、その懇ろな描写。二首目ともにもさ
ざやかな、然しある種散漫な自然の「こ
とわり」に奥村のこころが動いている。
その視線はより精緻になり、表現はしな
やかさ・文体の強さを増している。(歌人

澤村育美歌集「竜の眠つてみた跡」「塔」
編集長による12年ぶりの第3歌集。「花は木
を、私は君を残してゆかもしれないがまあ
飲め、けふは」(砂子屋書房・3300円)
齋藤芳生歌集「牡丹と刺繍」「かりん」
選者で福島市の学習塾で教える著者の著による第
4歌集。「春のみずが映す世界は美しいお前
が石を投げ入れるまで」(現代短歌社・2970円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

